

青森県における心身障害児の高校入学・就学に関する実態

A Study of Enrollment of Handicapped Adolescents in High Schools in Aomori Prefecture.

安 藤 房 治*

Fusaji Ando

(1987. 12. 22 受理)

論 文 要 旨

本研究は青森県内の高校を対象に、障害生徒の入学、就学実態を明らかにすることを目的とした。

調査の結果、県内の高校には25校52名の障害生徒が在籍していること、さらに入学・復学問題を経験した高校も含めれば、約6割の高校が障害生徒の就学問題を経験していることが明らかになった。

また、入学者選抜試験において障害を配慮している学校は23校、就学上障害を配慮している高校は18校あった。一方、入学者選抜試験において障害についての制限を設けている高校が10校あり、8校について制限の内容を把握することができた。

I. 緒 言

現在、心身障害児（以下、障害生徒とする）の後期中等教育は、主として特殊教育諸学校高等部で保障されているが、学校教育法は、高等学校（以下、高校とする）に「特殊学級を置くことができる」（第75条）と規定しているように、高校での障害児教育を明確に位置付けている。現実には、高校に特殊学級が設置されていないものの、多数の障害生徒が就学していると思われる¹⁾。しかし、高校における「障害生徒のための施設・設備の準備は著しくおこなわれている」し、就学の実態はほとんど把握されていない²⁾。本調査は、以上の点を踏まえて青森県における障害生徒の高校入学・就学実態を把握することを目的とした。

II. 方 法

1. 予備調査

(1) 対 象

青森県内公立・私立高校（分校、定時制を含む）89校。

(2) 手続き

質問紙法。往復はがきにより、障害生徒の在籍状況、過去5年間での障害生徒の入学・復学問題の発生状況、入学試験における制限、の3項目について回答を求めた。

(3) 期 間

1986年9月10日に発送し、9月30日に回収を終了した。

2. 本調査

(1) 調査内容と対象

予備調査にて回答の得られた青森県内の公・私立高校（分校、定時制を含む）81校を対象に、それぞれ該当する（予備調査の結果にもとづいて）調査用紙を送付し、回答を求めた。具体的な調査とその対象校数は以下の通りである。

＜調査A＞障害生徒の在籍状況……………81校

* 弘前大学教育学部 心身障害学科教室

Department of Mental and Physical Handicap, Faculty of Education, Hirosaki University

＜調査B＞過去5年間に発生した入学、復学問題……………25校
 ＜調査C＞入学者選抜試験における配慮事項……………49校
 ＜調査D＞入学者選抜試験における制限……………15校
 ＜調査E＞障害生徒の入学、復学についての今後の方針……………81校

(2) 手続き

上記調査用紙をそれぞれ該当校に郵送し、回答を求めた。

(3) 期 間

1986年10月15日に発送し、11月10日までに回収を終了した。

III. 結 果

1. 予備調査

対象校89校中81校から回答が得られた（回収率91.0%）。障害生徒が在籍しているかどうかの質問に対して「いる」と回答した高校は40校（49.4%）であり、「いない」と回答したのは41校（50.6%）であった。

過去5年間で障害生徒の入学や復学について問題になったことがあるかどうかの質問に対して、「ある」と回答があったのは25校（30.9%）で、「ない」と回答があったのは56校（69.1%）であった。

なお、現在障害生徒の在籍がなく、かつこれまで入学、復学の問題が起きたことがないと回答したのは32校（39.5%）であった。

入学者選抜において心身の障害による制限を設けて「いる」と回答した高校が15校（18.5%）で、「いない」と回答した高校が66校（81.5%）であった。

2. 本調査

本調査の回収状況は表1に示したように、＜調査A＞63.4%、＜調査B＞52.0%、＜調査C＞73.5%、＜調査D＞66.7%、＜調査E＞75.3%であった。

1) 調査A

在籍している障害生徒について25校から52名のデータが得られ

表1 本調査の回収状況

調 査 名	発送数 (校)	回 収	
		数(校)	率(%)
A	41	26	63.4
B	25	13	52.0
C	49	36	73.5
D	15	10	66.7
E	81	61	75.3

表2 障害生徒の学科別在籍数

(単位: 人)

障害 性 別	肢体不自由		聴 覚		視 覚		病・虚弱		言 語		情 緒		精神薄弱		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
普 通	4(2)	14(1)	3	11	4	1(1)	7(1)	0	1(1)	0	0	0	0	0	17	25
家 政	0	2(1)	0	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
商 業	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1
酪 農	1(1)	0	0	0	1	0	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	2	0
造 園	0	0	1(1)	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	0	1	0
農 業	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
建 築	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
情報処理	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
計	5(3)	16(2)	6(1)	12(1)	5	1(1)	9(2)	1	2(2)	0	1	0	0	0	24	28
	21(5)		18(2)		6(1)		10(2)		2(2)		1		0		52	

た。その結果は表2の通りである。

障害の内訳を見ると、肢体不自由、聴覚障害生徒の在籍が多く、病・虚弱、視覚障害生徒がそれに続いている。言語、情緒障害はわずかであり、精神薄弱はまったくなかった。

本調査では、個々の生徒の障害の内容や程度の記述を得たことにより、障害の状況も把握することができた。肢体不自由21名の内、3名は上肢または指に障害があるものの、筆記や手作業が少々遅い程度であった。下肢に障害のある者が10名、その内義足、松葉杖を使用している者がいずれも2名で、車椅子を使用している者はいなかった。四肢に障害のある者2名、脊柱湾曲症2名、半身の障害のある者4名（うち1名は休学中）であった。出身校種別に見る（表3）と、養護学校中学部からの入学者6名中5名は、下肢に障害を有する者であった。

表3 障害生徒の出身校種別在籍数

(単位：人)

障 害 出 身	肢 体	聴 覚	視 覚	病・虚	言 語	情 緒	精 薄	計
中学校 普通学級	15(2)	15	6(1)	5	1(1)	1	0	41
中学校 特殊学級	0	2(1)	0	0	1(1)	0	0	2
中学部 養護学校	6(3)	1(1)	0	5(2)	0	0	0	9

表2、表3注) () 内の数字は、重複障害者数で内数。重複障害の場合、それぞれの障害で数えられているので、重複障害生徒数を減じた数が合計の数値となっている。たとえば、表3の「中学校特殊学級」出身生徒2名のうち、1名は聴覚と言語の重複障害生徒であることを示している。

聴覚障害生徒18名の内、補聴器を使用してもほとんど聞こえず、言語障害も併せ持ち、意思の疎通が困難な程度の難聴生徒は特殊学級出身の1名だけであった。ほとんどの者は、補聴器の使用により日常会話に支障のない軽度および中等度難聴生徒であった。また、知能の遅れを伴っている者はなく、かえって学業成績の優れた者さえあった。また、18名中15名は中学校普通学級からの入学者であった。

視覚障害を有する生徒6名中3名は、片眼のみの失明または低視力であり、他眼に異常がなく日常生活を支障なく営んでいる。2名は重度弱視で、授業等では弱視レンズを使用しているが、日常生活ではあまり支障はない。6名共普通学級出身であった。

病弱・虚弱生徒10名は通常学級から入学した者と養護学校から入学した者とが半々であった。現在、治療のため休学中の2名（ネフローゼ症候群、神経性多発性円形脱毛症）を除いては、後遺症（血友病、レックリングハウゼン病）のため運動制限があり体育等を見学する他は、特に日常生活に支障をきたしていない。言語障害を持つ者については、聴覚障害の部分で述べた1名の他、軽い手の障害を重複している者が1名だけであった。調査用紙に特記事項がないことから、日常生活には大きな支障がないものと思われる。

最後に、情緒障害生徒1名の事例では、高校入学後交通事故のため脳を損傷し、著しく集中力を欠くようになったが、教師の配慮により大きな支障なく学校生活を送ることができていた。

2) 調査B

過去5年間、障害生徒の入学について起きた問題は、現在在学している障害生徒が入学した際の問題を除いて、7校から8例の報告があった（表4）。復学については、2校から2例の報告があった（表5）。

入学の際問題となった事例は、難聴2名（内1名は片眼球欠損を重複）、肢体不自由3名（内車椅子使用者、松葉杖使用者が各1名）、病・虚弱4名（内ぜん息3名、水頭症1名）であった。以上の9名の中で入学が許可されなかった者は、水頭症（虚弱）の男子1名のみであった。この例は、体育を見学にし、学校生活も教育上の配慮があれば十分可能であるとの判断で受験は許可されたが、結果的には学力が及ばず不合格となった。また、入学はしたもののぜん息の3名は、いずれも病状悪化のため、入学後1年以内に退学または養護学校へ転校した。

表4 過去5年間の入学者数(在籍者を除く)

学科	障害 性別	聴 覚		病 ・ 虚		肢 体		計	
		男	女	男	女	男	女	男	女
普 通		0	1※	1	1	2	0	3	2
商 業		1	0	0	0	0	0	1	0
農 業		0	0	1	0	0	0	1	0
電 気		0	0	0	0	1	0	1	0
計		1	1	2	1	3	0	6	2
		2		3		3		8	

※視覚障害を重複

表5 過去5年間の復学者数(在籍者を除く)

学科	障害 性別	肢 体	
		男	女
普 通		0	2
商 業		1	0
計		1	2
		3	

表6 入学試験での障害への配慮

回 答		N(校)
ア. されている		23 (63.9)
内 容	別室設定	12
	口頭説明	4
	教室・座席の配慮	2
	特製机の使用	1
	洋式便所設置	1
	拡大鏡使用	1
イ. されていない		13 (36.1)

() 内は%

表7 授業での障害への配慮

回 答		N(校)
ア. されている		18 (50.0)
内 容 (複数選択)	教室・座席の配慮	7
	困難な科目免除	5
	教師がその場で配慮	3
	音量・話し方	2
	教科書拡大	1
	クラスで協力	1
イ. されていない		18 (50.0)

() 内は%

表8 履習困難科目での配慮

回 答		N(校)
ア. されている		32 (88.9)
内 容 (複数選択)	可能な範囲だけ	23
	教師がその場で配慮	16
	見学レポート・審判	11
	座席位置	2
	特別カリキュラム	1
イ. されていない		4 (11.1)

() 内は%

表9 障害生利用施設・設備

回 答		N(校)
ア. ある		4 (11.1)
(内複数選択) 容	身障者用トイレ	4
	てすり	2
	スロープ、段差解消	1
イ. ない		32 (88.9)
計		36(100.0)

() 内は%

在学中に事故等で障害を負った場合の復学問題についてであるが、3名中2名は、下肢障害のため松葉杖を使用しながらも復学が認められ、無事卒業している。

3) 調査C

この調査は、過去5年間に障害生徒の入学を認めている高校を対象に、入学や就学にあたっての配慮等の実態を調べたものである。結果は、表6～9に示している。

入学者選抜試験においての配慮は、23校(63.9%)でなされている。配慮の内容は、別室の設定(12校)

が最も多く、口頭で試験問題を説明したり（４校）、座席の位置を配慮をしている（２校）高校があった。また、特製机、洋式便所の設置、拡大鏡の使用など設備・備品面での配慮もされている高校もあった。

特に配慮をしていない高校が13校（36.1%）あったが、その理由は「今までその必要がなかった」ことがあげられている。

次に、授業での配慮についてであるが、配慮している高校、していない高校が共に18校であった。配慮は、教室を一階にする、座席を前にするという内容が最も多かった。弱視者のための拡大教科書を作成している高校もあった。その他の例では、難聴生徒のために、教師が生徒の方を向いてゆっくり大きな声で話すなどの教師の配慮や、クラス全体で協力して移動の介助をする例があった。特に、配慮していない高校は、前問と同様理由はその必要がないということであった。

体育や音楽、美術等の受講困難な科目における障害生徒への配慮についての回答では、配慮している高校は、32校（88.9%）あった。配慮の内容は、可能な範囲だけやらせたり、実技を免除して見学レポートや審判に代えたりする例が多かった。また、教師がその場で配慮しながら指導している高校も多かった。

特別な施設・設備の有無については、およそ9割の高校では施設・設備は全く無かった。4校に有ったのは、身障者用トイレ（４校）、スロープの設置または段差の解消（１校）、手すり（２校）であった。

障害児に対する健常児の態度についての回答では、およそ半数の高校では、障害生徒だからといって特別視せず、健常生徒と変わらない態度で接しているようであった（表10）。さらに10校（27.8%）では特に好

表10 障害生徒に対する健常生徒の態度

回 答	N(校)	%
ア. 特に好意的	1	(2.8)
イ. 特に協力的	9	(25.0)
ウ. 健常生徒と変わらない	20	(55.6)
エ. 無関心	0	(0)
オ. 非協力的	0	(0)
カ. 拒否的	0	(0)
キ. その他	2	(5.5)
無回答	4	(11.1)
計	36	(100.0)

() 内は%

表11 健常生徒への影響

回 答		N(校)
ア. あると思われる		14 (38.9)
(複数選択可)	相手を思いやる心	8
	弱者へのいたわり	2
	努力しようとする心	2
	その他	4
イ. あるとは思われない		17 (47.2)
無 回 答		5 (13.9)
計		36(100.0)

() 内は%

表12 障害生徒の変容

回 答		N(校)
ア. 見られた		15 (41.7)
「ア」(複数選択) の内容	自信が出た	5
	努力していた	5
	明るくなった	4
	意欲的になった	2
	その他	6
イ. 見られない		16 (44.4)
無 回 答		5 (13.9)
計		36 (100.0)

() 内は%

意的または協力的に接している。無関心、非協力的、拒否的といった態度はない。しかし、「その他」の回答の中には、「障害児個々の性格により、周囲の態度も異なる」とあるとか、「個人によって異なり一概には言えない」というものもあった。

健常生徒が障害生徒と共に学ぶ事から何らかの影響を受けているかどうかについて回答を求めた結果は表11で示した。影響を受けていると「思われない」(47.2%)が「思われる」(38.9%)を上回っていた。「思われる」と答えた14校の中では「相手の立場を考えようとする思いやりの心が育ってきている」という答えが多かった。続いて「協力すること・努力することの大切さを感じてきている」ことがあげられている。「障害者問題や福祉問題への関心が高まった」という回答

表13 入学者選抜における制限

対象の障害	障 害 の 程 度 等	制限を設けている学科 ()内は学科数
色覚	色盲(色弱は可)	建築 ⁽²⁾ , 機械 ⁽¹⁾ , 電気 ⁽¹⁾ , 農業 ⁽¹⁾ , 畜産 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾ , 園芸 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽²⁾ , 漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾ , 水産製造 ⁽¹⁾
視	両眼とも各々, 矯正視力 0.3 未満	機械 ⁽¹⁾ , 電気 ⁽¹⁾ , 建築 ⁽¹⁾
	両眼とも各々, 矯正視力 0.4 未満	建築 ⁽¹⁾
	両眼とも各々, 裸眼視力 0.1 未満。矯正視力 0.6 未満	漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾
力	学習・実習に支障がある	水産製造 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾
	日常生活に支障がある	生活 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾
聴	左右とも難聴	建築 ⁽¹⁾
	両耳とも30cm離れた秒時音が聞こえない	漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾
	日常会話が困難	農業 ⁽¹⁾ , 畜産 ⁽¹⁾ , 園芸 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾
力	日常会話に支障がある	生活 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾ , 普通 ⁽¹⁾
	学習・実習に支障がある	水産製造 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾
言 語	日常会話が困難	農業 ⁽¹⁾ , 畜産 ⁽¹⁾ , 園芸 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾
	日常会話に支障がある	漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾ , 建築 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾ , 普通 ⁽¹⁾
	学習・実習に支障がある	水産製造 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾
病・ 虚 弱	修学不能と医師の診断がある	電気 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾ , 普通 ⁽¹⁾
	学習・通学が困難	農業 ⁽¹⁾ , 畜産 ⁽¹⁾ , 園芸 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾
	学習・実習に(著しく)支障がある	水産製造 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾ , 建築 ⁽¹⁾
	強健でない	漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾
	全教員による協議	普通 ⁽¹⁾
肢 体	利き手の指(人差し指または中指)喪失。実習・体育等に支障がある	機械 ⁽¹⁾ , 電気 ⁽¹⁾ , 建築 ⁽¹⁾
	学習(作業・実習・実験・体育等を含む)に著しく支障がある	漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾ , 水産製造 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾ , 電気 ⁽¹⁾ , 建築 ⁽¹⁾
	学習(体育・実習を含む)が困難	農業 ⁽¹⁾ , 畜産 ⁽¹⁾ , 園芸 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾
精 神 薄 弱	中～重度	農業 ⁽¹⁾ , 畜産 ⁽¹⁾ , 園芸 ⁽¹⁾ , 生活 ⁽¹⁾
	学習に著しい支障がある	生活 ⁽¹⁾ , 酪農 ⁽¹⁾ , 建築 ⁽¹⁾
	学力不足	漁業 ⁽¹⁾ , 機関 ⁽¹⁾ , 水産製造 ⁽¹⁾ , 無線通信 ⁽¹⁾
	全教員による協議	普通 ⁽¹⁾

もあったが、一方では「一部に排斥的行動をする生徒が出て来た」という回答もあった。「思われない」高校からは「健常児と何ら変わらないため、特に障害児から受けた影響というものはない」という意見もあった。

前問とは逆の、障害生徒が高校で学ぶ中で何らかの変容があったかどうかについての回答では、変容が「見られた」とする高校(41.7%)と「見られない」とする高校(44.4%)がほぼ同数であった(表12)。「見られた」とする中では、「自信を持つようになった」や「明るくなった」「何事にも努力しようとした」などの回答が見られた。全般的に、人間関係が広がり、明るさや強さが増す等の変容が見られている。しかし、養護学校中学部から入学してきた病弱児2名(共にぜん息)は、通学の困難や集団生活への不適応等から病状が悪化し、再び養護学校へ転校せざるを得なかった例もある。

特に変容が「見られなかった」高校の中には「小, 中から普通学級に所属しているため特に高校に入ってからの変容はない」や「本人も周りも障害児として意識しておらず、特に変容はない」との回答があった。

4) 調査D

これは、入学者選抜において心身の障害に関する制限を設けているかを調べたものである。10校から回答があったが、2校は制限の内容が明確でなかったため、8校17学科についての結果を示す(表13)。

制限を設けている学科のほとんどは職業科であった。

障害別に見ると、色覚異常について制限を設けている14学科は、すべて色弱は認めるが色盲は認めないという規準を設けている。視覚障害、聴覚障害、言語障害、病・虚弱、肢体不自由についての制限では、「学習・実習に支障がある者」は認めないという規準が共通して設けられていた。他の例をあげれば、機械科や電気科や建築科等においては、「著しく視力が低い者」、漁業科と機関科においては聴覚障害、病・虚弱についての制限があった。精神薄弱については4学科(同一校)で「学力が入学規準に満たない者」とあった。中～重度は入学を認めない学科が4学科あった。

5) 調査E

これは、高校側の障害生徒の受け入れに関する今後の方針について回答を求めたものである。結果は表14に示した。

今後障害児が入学を希望してきた場合、「学力が達していても、障害の状態によって検討する」高校が58校(95.2%)であった。「どのような障害があっても、学力が達していれば入学を許可する」と回答した高校は1校であった。しかし、「学力はどうであれ、障害のあるものは認めない」という、障害を理由に門前払いをする高校はなかった。

表14 入学者・復学者への今後の対応

	回 答	N(校)
入 学 者	ア. 学力が達していれば許可	1 (1.6)
	イ. 障害の状態で検討	58 (95.2)
	ウ. 不許可	0 (0)
	エ. その他	1 (1.6)
	無回答	1 (1.6)
	計	61(100.0)
復 学 者	ア. 許可	5 (8.2)
	イ. 障害の状態で検討	54 (88.6)
	ウ. 不許可	0 (0)
	エ. その他	1 (1.6)
	無回答	1 (1.6)
	計	61(100.0)

次に、在学中に事故や病気等のために障害を負った場合の対応についての回答では、「障害の状態によって検討する」高校が54校(88.6%)と最も多く、「どのような障害があっても復学を認める」という高校が5校であり、入学者の選抜の場合よりも受け入れ姿勢を示す高校が多かった。この間に対しても、「復学は認めない」と答えた高校はなかった。

最後に、障害児が特殊教育諸学校以外で教育を受けることについての意見を求めた。結果は表15に示した。

「とても良いことだ」8校(13.1%),「良いことだ」19校(31.1%)と、肯定的な回答をした高校は27校(44.2%)と半数近かった。理由には「教育の機会均等が保障されているのだから当然である」、「障害児は将来健常者社会の中で生きて行かねばならないのであるから、学校生活のうちから慣れねばならない」、「健常者にとって障害者への理解が深められる」などの意

見があった。さらに積極的な意見としては「障害者のための設備・施設を備えた高校も設置されるべきである」というものもあった。

しかし、障害児の就学を「良し」としながらも、施設・設備の不備から「障害児に過重負担を強いのか」「安全性の保障ができるか」といった危ぐも出されていた。また、「本人にとっては良いと思われるが、設備・施設の整備のための費用や、教師にかかる負担を考えると問題があるのでは」という意見もあった。

最も多かった「どちらともいえない」(28校: 45.9%) 高校の理由として、意義は認めながらも、「施設・設備の不備から本人にとって過重負担となったり、危険がある」ということや、「授業や特別活動において健常児と同様にできないことが、障害児にとって精神的苦痛にならないか」という理由が上げられていた。特に職業科の高校では「教育課程上実習や作業等が多く、途中で挫折したり、就職が難しくはないか」といった不安を出してきている。また、「障害の状態や性格等個々の場合によって異なり、一概には言えない」点も理由の一つであった。さらに「障害児教育も充実されてきており、専門的立場からの判断が妥当ではないか」とする意見もあった。

「あまり望ましくない」とする2校についても、その理由は「施設・設備の不備、指導できる教師がいないため、安全で適切な教育を保障できない」ことであった。

IV. 考 察

1. 障害生徒の在籍状況

調査の結果、現在青森県内の高校40校に52名の障害生徒が在籍していることが明らかになった。この数値は、筆者の調査前の予想を上回るものであった。

青森県国民教育研究所は、県内の盲・聾・養護学校中学部および中学校特殊学級卒業生の進路調査を行い、³⁾ 高校への進学者数を調査した。同調査によれば、1984年3月現在で、その数は養護学校中学部からの進学者が13名、中学校特殊学級からの者が4名であった。合わせて進学者は17名であり、仮に同数程度の進学者が毎年あったとすれば、3年間で54名となる。この数は、本調査の在籍生徒数にはほぼ匹敵する。しかし、中学校特殊学級卒業生(精神薄弱)で私立高校に進学した生徒が、1983年3月で8名、1984年3月で4名いるにもかかわらず、本調査では精神薄弱生徒の在籍はゼロであった。また、県内の盲、聾学校から高校への進学者は1984年3月に限ってみればゼロであるにもかかわらず、本調査では高校には聴覚、視覚障害生徒が在籍していることがわかった。したがって、国民教育研究所による高校進学者調査の数と本調査での高校在籍生徒数とは同一とは言えない。

在籍している障害生徒数を学科別に見ると、普通科が8割を占め圧倒的に多い。これは、高校に設置されている学科では普通科が最も多いので当然な結果でもあろうが、調査Dでも分かるように、普通科に比べて職業科の方が入学者選抜に制限を設けている高校が多く、障害生徒の入学、就学が困難であるためではないかと考えられる。

次に、在籍している障害生徒の障害の種類と程度について検討してみる。

県内の高校には、聴覚障害、視覚障害、病弱・虚弱、言語障害、情緒障害の障害を持つ生徒が在籍していた。身体障害生徒がほとんどであり、精神薄弱の生徒は在籍していなかった。高校の入学者選抜は主として学力を規準して行われるので当然の結果であるとも言えよう。しかし、先の青森県国民教育研究所の調査は、少数であるが精神薄弱特殊学級の卒業生が進学していることを明らかにしている。また、調査Dでもわかるように、精神薄弱生徒の入学、就学は全面的に認められていないわけではなく、受け入れ方針をとっている高校もあったことに注目したい。

表15 障害生徒が特殊教育諸学校以外で教育を受けることについて

回 答	N(校)
ア. とても良いことだ	8 (13.1)
イ. 良いことだ	19 (31.1)
ウ. どちらともいえない	28 (45.9)
エ. あまり望ましくない	2 (3.3)
オ. 望ましくない	0 (0)
無回答	4 (6.6)

() 内は%

在籍生徒の8割が、中学校卒業者であり、障害の程度は、中学校での学習が可能な、障害の軽い生徒が多いことが伺える。たとえば、最も在籍数の多い肢体不自由生徒の場合でも、松葉杖使用者2名、義足装着者1名で、車椅子使用者は無かった。回答を見る限り、ほとんどが身体の一部だけの障害で、体育を見学する以外は、それほど学校生活に支障をきたしてはいない。また、聴覚、視覚、言語、情緒の障害生徒も、日常会話に困難がない程度にコミュニケーションが成立している生徒が大半であった。

障害の軽度の生徒が多いことは、調査Cからも考えられる。つまり、入学者選抜試験や授業において障害生徒への配慮をしていない高校が少なくなく、その理由も「必要がない」とされていることから、重度の生徒は受け入れられてはいないと考えられる。

2. 障害生徒の受け入れ体制について

まず、入学者選抜における配慮については、回答のあった高校の内6割以上(23校)が配慮しており、また、授業についても半数(18校)が何らかの施設・設備面での配慮をしており、障害生徒の受け入れについては前向きな姿勢がとられていることがうかがえる。しかし、高校全体(89校)からみればその比率は高くない。

今後の障害生徒の受け入れの方針については、調査Eの結果に見られるように、障害があるからという理由だけで入学を拒否するということではなく、障害の状態等個々の場合によって検討するとの方針をとっている高校がほとんどであった。在学者が障害を負った場合の復学に対する方針も同様であるが、どんな障害を負っても復学を認めるという回答が若干増加した。健全生徒と共に学ぶことが可能であると判断される場合は受け入れるし、それは両者にとって有意義であるとは認めながらも、障害生徒が特殊教育諸学校で教育を受けることが良いかどうかについて「どちらともいえない」が半数近くを占めていた。「どちらともいえない」理由の一つとして、施設・設備の不備があげられており、また調査Cの結果からも分かるように、障害生徒のための特別な施設・設備はほとんどの高校で配慮されていないことが、「どちらともいえない」の回答が多くを占めた理由ではないかと考えられる。

(追記) 本調査の実施に当たりご協力いただきました県内の高校関係者に深く感謝申し上げます。また、資料整理にあたっては熊谷ちはるさん(昭和61年度養護学校教員養成課程卒業)の助力があったので、記して感謝申し上げます。

(注)

- 1) たとえば、昭和59年度で、盲・聾・養護学校高等部と高校との間の転出入は、全国で2,500名余にのぼっている(文部省初中局特殊教育課：特殊教育資料，昭和60年度)。
- 2) 近津経史：高等学校に学ぶ障害児，障害児教育実践体系・6，P.252，1984。
- 3) 青森県国民教育研究所障害児教育研究委員会：すべての障害者に豊かな生活と労働の保障を一障害児学級・学校の進路実態と私たちの要求一，1985。